

第22回 厚木看護専門学校 教育課程編成委員会 議事録

日時：2026年9月17日(木)

16:00～17:10

場所：厚木看護専門学校 会議室

1 外部委員出席者（6人）

- (1) 北野 義和（厚木病院協会副会長）
- (2) 和田 幸子（神奈川県看護協会県央支部支部長）
- (3) 下島 三千代（東名厚木病院看護部長）
- (4) 神保 京美（伊勢原協同病院副院長兼看護部長）
- (5) 内田 良彦（厚木市健康こどもみらい部こども家庭センター・健康医療担当部長）
- (6) 宗方 泰司（神奈川県立厚木王子高等学校長）

【欠席：高野 秀雄（厚木医師会長）】

2 厚木看護専門学校教職員出席者（5人）

学校長 五十嵐一美【委員長】

副学校長 田原裕子【副委員長】

看護学科長 池田紀子、看護学科技幹 中原真弓、総務課長 長塚彩加

看護学科技幹 安藤直子【オブザーバー】

看護学科総括主査 高橋隆子【オブザーバー】

看護学科総括主査 赤堀貴子【オブザーバー】

(1) 議題

- ① 2025年度 学年目標と到達度評価について
- ② 就職病院における卒業生の実態等に関する調査について
- ③ Self-Learning day（金曜日の自由登校制）の成果について
- ④ 厚生労働省 遠隔授業推進事業におけるeラーニングの導入について

(2) (1)の議題に関する質疑応答、意見交換

(3) 配布資料

- ① 2025年度 学年目標と到達度評価
- ② 就職病院における卒業生の実態等に関する調査
- ③ Self-Learning day（金曜日の自由登校制）の成果について
- ④ 教育課程編成委員会名簿
- ⑤ 教育課程編成委員会規程
- ⑥ 座席表

3 内容等

【田原副学校長】

配付資料の確認を行った。当委員会規程第5条第7項に基づき定足を満たしている。

【五十嵐学校長】

前は3月12日に開催したが、その際は国家試験の合格発表前であったため結果を報告できなかった。本日はSelf-Learning day（金曜日の自由登校制）の成果と併せて報告する。国家試験合格率は95.7%で、全国平均及び前年の合格率を上回る結果であった。Self-Learning dayの成果の一つであると考えている。

また、今年度は77名が入学した。定員80名に対して3名の定員未達であったが、教職員一同で学生確保に取り組んできた結果である。特に、本日出席いただいている宗方委員には、厚木王子高校から7名の学生を送り出していただいたことに感謝申し上げる。

今年度の入試も始まっているが、前年と比較すると受験者数は大きく減少しており、非常に厳しい状況である。現段階では定員を大きく下回る可能性もあり懸念しているが、最後まで学生確保に向けて取り組んでいく考えである。

一方で、学生確保において最も重要なのは良い教育であるとの認識である。教育課程や教育方法について、委員の皆様から多数の意見をいただきながら改善を重ね、より良い教育を提供していくことを目指している。

ダブルスクール制度については、開始から3年が経過し、第1期生6名が卒業した。現在は看護師1年目として勤務しながら、放送大学4年生として学習を継続している。全員がほぼ必要単位を修得しており、放送大学卒業は確実な見込みである。現在は学位授与機構へ提出する学位論文の指導を行っており、看護学の学位取得を目指して6名が取り組んでいるところである。今後、良い報告ができればと考えている。

また、本年3月にはロサンゼルス看護研修を実施した。正課カリキュラムとは別に実施しているものであるが、グローバルな視点を持ち、世界を視野に入れて看護を考える機会とすることが目的である。参加した学生は、研修後に学習へ向かう姿勢が大きく変化した。特にアメリカの看護大学の学生との交流において、大きな刺激を受けたとの声が聞かれた。ロサンゼルス看護研修は3年後にも実施を予定している。一人でも多くの学生に学びの機会を提供できるよう準備を進めていく考えである。

本日は4点の議題を予定している。委員の皆様には忌憚のない意見をいただき、当校の教育課程編成にご協力いただきたい。

【田原副学校長】

外部委員紹介及び、当校教職員紹介を行った。

【五十嵐学校長】

次第に基づき進行する。議題は4点ある。まず議題①②③の資料をまとめて説明し、質疑・検討に進める。

【中原技幹】

配布資料に基づき、「①2025年度 学年目標と到達度評価」について説明した。

【池田看護学科長】

配布資料に基づき、「②就職病院における卒業生の実態等に関する調査」について説明した。

【池田看護学科長】

配布資料に基づき、「③Self-Learning day（金曜日の自由登校制）の成果について」について説明した。

【池田看護学科長】

「④厚生労働省 遠隔授業推進事業におけるeラーニングの導入について」についてスライドを使用して説明した。

4 議題①「議題①2025年度学年目標と到達度評価」についての質疑応答

【五十嵐学校長】

Self-Learning day（金曜日の自由登校制）の成果についてである。当校では1・2年生は週4日登校としており、専門学校としては珍しい登校形態となっている。

この取組については、学習時間を調整して本当に学生の学習は大丈夫なのかとの意見を外部から多数いただいている。そのため、Self-Learning day に関してはデータを用いて示したいと考えている。

eラーニングについては、現在、厚生労働省の動向を見ながら導入に向けた取組を進めている。しかし、神奈川県ハードルが高く、賛同が得られない状況であり、板挟みの状態である。それでも推進したいと考えている。

全ての報告が終了したことから、ここから意見をいただきたいと考えている。

まず、学年目標、到達目標及び評価について、質問や意見をお願いしたい。

学年目標と到達度評価については、あくまでも主観的評価による部分がある。また、2年生の評価が例年厳しい状況であることには変わりないと認識している

【神保委員】

2年生は毎年このような傾向がある。学生個々の違いはあるものの、代が替わっても同様の結果となる傾向である。

【五十嵐学校長】

例年2年生は厳しい状況となる傾向があり、毎年同様の結果が見られる。学年ごとの特徴はあるものの、2年生については例年共通した傾向であるとの認識である。

【宗方委員】

3年生の学年目標⑤「課題を発見し探求し続ける」の「探求」の字は、「探究」の字ではないかと思う。

先ほど池田先生からも話があったように、課題を解決する力はもちろん身に付けていかなければならないが、課題を発見する力も大事であると考えている。現在の学生は、高校生も含めて答えを先に求める傾向がある。ゲームであれば攻略本を読んでから始めるように、答えを知ってから取り組もうとするところが課題であると考えている。

患者一人ひとりの症状は異なり、マニュアルどおりにはなかなか進まない。そのことに気付く力は、この課題を見つける力であると思っている。

当該項目の数値は、学生自身の自己評価によるものではあるが、他の項目と比較するとやや低い状況である。その点は気になることであり、今後さらに力を養っていきたいと考えている。

1年生の「④他者を理解し協調性を高める努力ができる」の数値は高い。他者理解や他者受容については共同性につながるものであり、これからの社会で身に付けなければならない力であると文部科学省や経団連も指摘している。

一方で、「①人間関係を豊かにすることができた」の数値は下がっており、「②人間関係を深めることができた」の数値も低い。協調性を高める努力はしているものの、人間関係を深めることができていない状況であり、このあたりが課題であると思われる。

1年生は、やはり人との関係性の持ち方などについて、課題を抱えていると認識される。

【池田看護学科長】

学生の協調性については、一部の学生において、クラス内で協調性を持ちながら他者と関わろうと懸命に取り組む姿勢が見られる。一方で、他クラスの学生との関わりは乏しく、同じクラスであっても一度も話したことがない学生もいる状況である。そのため、人間関係を広げることよりも、現在の親しい友人関係を維持することに精一杯であるとの印象を受けている。このような状況を踏まえ、演習では意図的にグループ編成を変更し、多様な学生と関わる機会を設けている。また、体育の授業では1年生全員80名を対象とした競技大会を実施するなど、時間をかけながら互いを理解し、交流を深める機会の創出に取り組んでいる。

【五十嵐学校長】

協調性については努力しているものの、人間関係を豊かに広げることが難しいという視点は大変興味深いとの意見があった。当校における学生の実態を捉える上でも重要な観点であり、今後も継続して状況を把握し、次年度以降の検証につなげていくことも有意義であると考えている。

5 議題②「就職病院における卒業生の実態等に関する調査についての質疑応答

【神保委員】

就職先病院の教育指導者を対象とした調査結果について、毎年参考にして楽しみにしている。その上で、資料2の教育指導者15名という回答数が、依頼した人数に対してほぼ同数の回答を得られた結果なのか、あるいは回答率としては低い状況であったのかについて伺いたい。

また、卒業生調査の回答率31%については低い印象を受ける。今後回答率を向上させるためにどのような工夫を考えているのか説明を求めたい。

【池田看護学科長】

就職先病院の教育指導者への調査については、回答率の提示はしていないが、卒業生数に応じて各施設の指導者へ依頼を行っている。その結果、回答をいただいた教育指導者が15名であった。なお、本年度は卒業生78名を対象として調査を実施した。

【神保委員】

就職先病院の教育指導者15名というのは、78名の卒業生一人ひとりに対応してくださった教育指導者が15名であったという意味なのか、それとも依頼を行った教育指導者のうち回答をいただいた方が15名であったという意味なのか確認したい。

【池田看護学科長】

教育指導者への依頼については、チューターという立場の者に限定したものではなく、卒業生の指導や育成に関わった方々へ依頼しているものと認識している。そのため、依頼対象者数を踏まえると、回答者数15名は十分とはいえず、回答数としては少なかったと認識している。

【神保委員】

病院としては1施設につき一つの回答を行った記憶があるため、教育指導者15名という数がどのような基準で集計されたものなのか確認した。また回答者数の数え方について確認した。

【池田看護学科長】

当方の見方・方法が間違っていたのか確認をする。

【下島委員】

教育指導者に関する調査については、病院側にも依頼が届いているが、回答者の区分としては「教育担当者」しか回答していない。

【神保委員】

共通のデータではなく、違う回答でのデータということか。

【池田看護学科長】

データの内容を詳しく精査し、確認する。

【神保委員】

教育指導者に関する調査については、回答結果が複数あった可能性があり、回答対象者がいずれかであったか記憶が定かではないが、確かに二つのパターンがあったかもしれないと認識している。

【下島委員】

実態等に関する調査については、実際に2年目の職員、パートナー、新人教育課の職員にも調査票を配布した記憶がある。また、彼らからも質問が寄せられていた。

【神保委員】

こちらの理解不足であるが、この数であるとすれば、こちらとしても適切にアナウンスを行う必要があると感じた。詳細が分かれば、後ほど連絡をいただきたい。

【池田看護学科長】

自分の認識が違っていたと実感した。

【五十嵐学校長】

評価は前学科長が結果を出していると聞いている。

【池田看護学科長】

前任者から引き継いだ結果を用いて報告した。今後は内容を十分に把握し、適切に説明できるよう努めたい。失礼した。

【宗方委員】

回答率に関して非常に興味深いデータであると感じた。一方で、31%という回答率が気になる。一般的に、どの職場でも比較的意識の高い人が率先して回答する傾向があるため、その場合、自身にも他者にも厳しい評価となる可能性が高いと考える。より客観的なデータを得るためには、回答率をさらに向上させる工夫が必要ではないかと思う。この31%という数値になった要因はどこにあるのか、また、この結果をどのように捉えているのか伺いたい。

【五十嵐学校長】

実態等に関する調査は、Teamsを活用して実施している。

【池田看護学科長】

学校で接続しているTeams内のFormsを用いて回答を依頼している。しかし、卒業後はFormsへの反応が著しく少なくなり、学生からの連絡も減少している。アンケート回答の依頼に対しても反応がなく、回答すると伝えていてもその後返答がない状況である。今後は卒業前に、当該時期のアンケートへの回答について改めて周知・依頼を強化していきたいと考えている。卒業後は学校との関わりを断つような意識を持つ卒業生もいるのではないかと推測している。

【宗方委員】

そもそも何のためにこの調査を実施するのかという意義を理解してもらうことが重要であるとする。教育水準や医療水準の向上のために、このデータは非常に重要なものであるという認識を持たせる必要がある。医療職を目指す学生であれば、そのような意

識は持ち得ると思われるため、調査の目的や意義をしっかりと伝える仕掛けを行うことで、より良い結果につながるのではないかと考える。また、資料の中に誤植と思われる箇所や科学的根拠の表現についても見直していただけるとありがたい。

【五十嵐学校長】

過去に紙媒体で実施していた時期は、これほど回答率が低くなかったと認識している。過去の結果を見ると、回答率は6割程度であった。現在はICTを活用し、卒業後も3年間つながりを維持しているが、実際にはシステムを開かなくなっている状況がうかがえる。この回答率については学校内で共有し、要因を分析した上で対策を講じていきたいと考えている。

【下島委員】

先生が分析された全体的な内容について、臨床現場で感じていることを踏まえて意見をさせて頂きたい。例えば表1、教育担当者と卒業生(看護実践)能力4領域・14項目での比較では点数や回答数の違いもあり、一概には言えない部分もあるが、意思決定の項目では教育担当者の評価が低い一方で、卒業生は自分自身を「できる」と評価している傾向が見られる。また、表2の「認識のズレから見える特徴」においても、説明と同意の項目では教育担当者が14、卒業生が16であり、生命倫理についても5回、10回の結果を見ると同様の傾向が見受けられる。

個人的な意見として、卒業生が自分自身を「できる」と評価すること自体は問題ないと思う。しかし、臨床現場では、自分はできるという認識が強いことで、十分な怖さやリスクを理解しないまま患者に関わってしまう場面もある。自己評価の妥当性についてどのように指導しているのか気になるところである。また、臨床と教育をどのようにつなげているのかについても伺いたい。「できると思っている」ことが実際にできていないわけではないと思うが、リスクへの認識が十分でなかったり、患者の言葉をそのまま受け止めて適切性を十分に検討しないまま関わったりすることもある。その点について何か考えや意見があれば伺いたい。

【池田看護学科長】

「できる」という評価については、本人自身が客観的に把握できていない可能性がある。一方で教育担当者から見ると、まだ十分にできていないという認識になるのではないと思う。先ほどの分析でもあったが、知識として持っていることから「できる」と認識する場合と、実際の場面でその知識を活用して力を発揮できることとは異なる。その判断の違いについては、より緻密に把握していく必要があると考える。特に前段階の項目については、学生は「勉強した」「習った」という経験をもって、「できる」と評価する傾向があるのではないかと感じる。

【下島委員】

回答の仕方にも要因があるのではないと思う。設問は実践レベルを求める内容として作成されているが、回答者が「知識として理解している」というレベルで評価してい

るのであれば、結果の解釈も変わってくる可能性がある。そのため、この認識のズレは、教育担当者と卒業生の評価の差だけでなく、回答者自身が想定している「できる」の意味の違いによるものかもしれないと考える。

【五十嵐学校長】

確かに教育担当者と卒業生では見えている景色が大きく異なると考える。教育担当者は豊富な経験や知見を持ち、広く深い視点から現状を評価している。一方、卒業生は自分が持っている経験の範囲の中で精一杯取り組んでおり、その結果として「できる」と回答している可能性がある。そのため、両者の評価に差異が生じること自体は自然なことである。

ただし、教育担当者は「できる」と評価しているにもかかわらず、学生や卒業生が自分自身を「できていない」と評価している項目については興味深いと感じた。教育担当者が「できていない」と考え、卒業生が「できる」と評価している項目はある意味当然とも考えられるが、反対に周囲からは評価されているにもかかわらず自己評価が低い部分は、今後の教育において着目すべき点ではないかと思う。

なお、設問については日本看護協会の内容を参考に変更したが、その結果として表現が曖昧になった面もある。今年度実施してみて、内容の理解が難しい部分があることも分かったため、今後は特に設問部分について精査し、改善を図っていきたい。

【神保委員】

表4において、「相互の理解に近づけると」という視点で見ると、新しい概念に関しては、教育者側の認識と卒業生側の認識に差があることがうかがえる。資料では「双方の理解を近づけるための教育方法の見直し」や「実践的な学習の機会」と記載されているが、これらについて具体的にどのような取組を考えているのか伺いたい。

【池田看護学科長】

実習の中で取り上げる内容について、より実践的な内容とするとともに、新しい教育課程で扱う内容も含めながら指導していく考えである。指導者や教員が連携し、それらの内容を実践の場面で活用できるような指導や働きかけを行っていく方針である。

【神保委員】

臨床指導者会議という場があるため、その中で新しい教育課程に関する内容について共有する機会を設けることも必要ではないかと考える。会議の時間は限られているが、新しい内容については我々の理解が十分ではないと感じる部分もあるため、概要だけでも伝えていただけるとありがたい。現場でも新しい知識や考え方を伝える努力はしているものの、それが臨床指導者まで十分に浸透しているかについては課題があるかもしれない。今後は実習病院側にも協力をお願いしながら進めていければと思うが、学校側から「こういったことに取り組んでほしい」といった要望があれば伺いたい。

【池田看護学科長】

学生は法律に関する内容を非常に苦手としており、その法律が看護とどのように関わっているのかという点の理解に課題がある。そのため在宅看護実習では、実習担当者のみならず事業者にも協力を依頼し、訪問看護ステーションを出た後、訪問先の患者宅においてどのような法律のもとで支援が行われているのか説明してもらうよう具体的に依頼している状況である。

また、新しい教育課程の内容については、臨床現場にも理解と協力を求めていく必要があるとの認識である。当校が取り組んでいる新しい授業内容について共有し、学内ではなく医療現場において関連する場面があれば学生に見せてほしいことや、新しい教育課程で用いている用語を使用して説明してほしいことなどについて、今後臨床側へ依頼していく必要があるとの考えである。

【神保委員】

臨床指導者と指導者会議の場が、より有効な場面になるように、ぜひその取組みを進めていただきたいとの意見をした。今回の説明を踏まえ、そのような観点から伺った。

【宗方委員】

認識のずれやストレスマネジメントという点は非常に興味深いテーマである。高校教員としての経験から、子どもたちを失敗させないように過度に手をかけてきたことへの反省がある。その結果として育った学生は脆弱な面を持っていたとの認識である。

臨床の場で重大な失敗は許されないものの、管理された環境の中での適切な失敗経験は必要ではないかとの考えである。学生は失敗によって落ち込みやすく、折れやすい傾向があるが、医療現場では困難を乗り越える力も求められる。自己評価の低さは、失敗から立ち直る力や不安の強さにも関係していると考ええる。

また、学生は答えをすぐに求める傾向があり、その結果、指摘を受けると「怒られた」と受け止めて落ち込んでしまう場面が見受けられる。Self-Learning day の考え方も踏まえ、あえてうまくいかない体験や失敗を経験させ、それを乗り越える過程を通して成長を促す仕組みを意識的に構築していくことが有効だと考える。

【五十嵐学校長】

当校の課題の一つでもあるが、専門学校の教員、特に看護師経験を持つ教員は世話好きな傾向がある。もともと人の世話をする職業に従事していた者が教員となっているため、学生に対して手をかけることを好む面がある。ただし、それが教育者として適切な関わり方であるかについては、常に教員間で問い直しているところである。

この点は教員間の議論の中核となっているテーマでもあり、学生の成長を促すための仕掛けづくりと併せて、教員自身の意識改革も必要であると強く感じている。

学生が少しの挫折で心が折れ、退学や休学につながってしまう状況は非常に残念である。そのため、教育現場において困難に直面してもしなやかに乗り越えられる力を育み、レジリエンスを高めていきたいと考えている。

【北野委員】

医療現場においてフィードバックが実際にどの程度実施されているのか。また、定期的にフィードバックを行う仕組みとなっているのか。

【五十嵐学校長】

フィードバックについては、Teams を活用して実施している。回答の依頼は全員に対して行っているが、誰が回答したかは把握できない形となっている。周知についても Teams で行っているが、病院へのフィードバックについては郵送により実施している。

6 議題③「Self-Learning day(金曜日の自由登校制)の成果について」の質疑応答

【神保委員】

金曜日の活用方法として、インターンシップへの参加という点は非常に有効であると感じた。病院としても、土曜日や日曜日よりも、実際に病院がしっかり稼働している平日に見学してもらいたいと考えている。そのため、この時間を確保できることは良い取り組みであると思う。金曜日に見学へ来る学生が比較的多かった理由についても、この制度によるものだったのかと納得した。

また、活用状況の中で、11 名がほとんど活用しなかったという結果が気になった。アンケート結果であるため、誰が活用していなかったのかまでは把握できないかもしれないが、そのような学生に対してどのようなアプローチや支援を行ったのか教えていただきたい。

【池田看護学科長】

この 11 名について、その後どの程度学習を継続したのかまでは明らかになっていない。ただし、3 年次になると金曜日は登校日となるため、Self-Learning day を活用できるのは 1・2 年生のみである。3 年次には国家試験が近づくことから、金曜日も強制的に学習する環境となり、のんびりしてられない状況になるため、学習時間は徐々に増えていったのではないかと考えている。

また、このような学生の状況は成績にも反映される傾向がある。そのため、チューターが早期に状況を把握し、模擬試験の結果などを踏まえて声掛けを行うなど、学習支援を実施している。取り残しが生じないような対応については、これまでも行っており、今後も継続して実施していく考えである。

【五十嵐学校長】

全体的に見ると、以前と比較して学習時間はおおむね増加したとのアンケート結果が報告されている。従来のように課題や宿題に追われる日々から一定程度解放され、自らの目的に応じて時間を活用できるようになったことが一因であると考えている。

実際に、各種検定試験の受験準備や、手話通訳者を目指して手話講座に通うなど、金曜日を有効に活用している学生も多いと聞いている。また、金曜日には学習塾や英会話サロンを無償で開催しており、希望する学生が自由に参加できる環境を整えている。今後もそのような機会をさらに増やしていきたいと考えている。

さらに、この取組みは入学試験においても大きな特徴となっており、Self-Learning day があることを理由に当校を志望する受験生も少なくない。一方で、本当に学習意欲を持って入学を希望しているのか、それとも週4日登校という点に魅力を感じているのかを見極める必要もあると考えている。

しかしながら、効率的に学びたいという価値観を持つZ世代の学生にとって、この制度は魅力的な要素となっていることを実感しており、一定の手応えを感じている。

【和田委員】

Self-Learning day は、自ら学ぶ力の育成を目的として導入しているものであり、その成果が結果として国家試験合格率の向上にもつながっているのではないかと考えている。学生が自ら「その日に何をするか」を考え、主体的に行動できる時間でもあるため、今後も継続していくことが望ましいと考えている。一方で、本日示された結果の中で、ほとんど活用していなかった11名の学生については、今後も支援や助言を継続し、そのような学生を少しでも減らしていくことが必要であると考えている。

また、県央地区の看護部主催の専門学校による新人研修においては、毎年40名程度を対象に講師派遣や講義を依頼しており、その内容は非常に好評で質が高いとの評価を得ている。

さらに今年度からは、経験者でより学びを深めたいと希望する者についても40名程度を対象としてこちらの学校で研修に関わることとなっている。

そのため、教員には現在の教育内容をさらにブラッシュアップしながら、引き続き質の高い教育を提供していただきたいと要望する。

7 議題④「厚生労働省 遠隔授業推進事業におけるeラーニングの導入について」の質疑応答

【北野委員】

eラーニングやSelf-Learning dayは非常に画期的な取組みであると感じているが、それらには何らかのモデルケースが存在するのか、それとも独自に企画・運営しているものなのか。また、全く異なる部署や領域で実施することもあるのかと。

【五十嵐学校長】

これはアイデアというよりも、時代の変化に対応する中で生まれてきた取組みである。かつての専門学校は大きな特色がなくても学校を開いていれば学生が集まる時代であった。しかし、そのような時代は終わり、現在は生き残りをかけた競争の中にある。そのため、自分たちが何を教えたいかだけでなく、学生が何を学びたいのか、どのように学びたいのかという視点を重視し、いわゆるマーケティングの考え方も取り入れながら様々なアイデアを形にしてきた。

ただし、アイデアを出すだけでは実現はできない。実際に取組みを動かしているのは教員であり、その実行力は非常に高いと感じている。方針を示して取組みを実施すると

決定すれば、教員が一丸となって確実に実践してくれる体制がある。

これらの取組みは全国に向けて公開しているが、実際に同様の取組みを実現できる学校は多くないと認識している。実施したいと考えても、それを形にするまでには多くの困難が伴う。その点において、当校の教員組織は総合力が高く、実行力を備えていると考えている。手前味噌ではあるが、そのことは当校の強みであると認識している。

【北野委員】

他の看護学校においても様々な工夫や取組みを行っていると思うが、近年の状況を踏まえ、それぞれが特色を打ち出しながら教育を展開しているのか。

【五十嵐学校長】

他の学校でも様々な特色ある取組みを行っていると思う。

しかし、当校としては、できるだけ日本でまだ行われていない取組みに挑戦したいという方針を持っている。また、既に他校が実施している取組みをそのまま真似することは好まず、他にはないものを創り出したいという思いにこだわりを持っている。

そのため、新たな取組みを検討する際には、学生のニーズや時代の変化を踏まえながら独自の発想で企画を行っている。逆に、他校が既に実施しているものについては、あえて手を出さないという考え方も持っている。

【北野委員】

宣伝方法について、どのような形で進めているのか。

【五十嵐学校長】

ホームページやオープンキャンパスへの参加により、本校の特色や教育内容を効率的に理解してもらえるはずだ。現在は集客・プロモーションが最も重要であると認識している。インスタグラムも開設しているが、ホームページの役割が大きく、動画等を活用しながら、いかに訴求力を高めるかが課題となっている。

あわせて高校訪問も重要だ。業者を通じて高校からの説明依頼にも積極的に対応している。

また、法人として、小学校・中学校・高校を含め、研修や説明会等の依頼は100%断らない方針である。対象者が1人でも2人でも足を運び、本校を知ってもらい、進路選択の候補としてもらうことを重視して活動している。

それから次のことを話しておきたい。

海外研修で視察した際、海外では看護教育における講義の多くがeラーニングで実施されており、対面で行われているのは演習と実習が中心であった。2030年頃のカリキュラム改正に向けた動きがあり、その調査の一環として海外視察も計画されている。その中には、eラーニングを活用してカリキュラムを運営している大学の視察も含まれており、厚生労働省もその方向性を示しているとの認識が示された。こうした流れを踏まえ、次期カリキュラムではeラーニングの導入が進むと考えられることから、本校としても先手を打って取り組んでいきたいと考えている。

また、本校で作成した共通動画を他校と共有したい構想がある。看護師養成には専門学校同士の連携が重要であり、互いに助け合いながら教育の質向上を図りたいと考えている。神奈川県内の看護学校で共通動画を作成し、疾病と治療など共有可能な科目については、他校の学生とも活用できる教材を整備したい構想もある。

さらに、神奈川県との調整も必要だ。本校がeラーニング導入を進めようとしているとの情報が神奈川県に伝わり、「認められない」との趣旨の連絡を受けた。神奈川県は様々な面で基準が厳しく、他県では実施できている取組みであっても、神奈川県では認められないケースも多々ある。eラーニングについても、他県の看護学校では導入が進んでおり、助産師課程では特に活用が進展しているようだ。今後も粘り強く取り組みを進めていきたい。

【北野委員】

病院関係や神奈川県病院協議会などは、新しい取組みや改革に対して積極的な取り組みもうとする姿勢を持っている状況だ。

【和田委員】

ロサンゼルスへ渡航する学生がいる中で、実際に海外で仕事をしている学生は今までにいないのか。

【五十嵐学校長】

海外で仕事をしている学生は実際に複数いる。彼らの意見も踏まえ、本校のダブルスクール制度の導入経緯について説明したい。以前平塚看護専門学校時代に4年制課程への移行を検討した旨を話したが、当校の海外で働く卒業生から「日本では大学卒業と同等の評価を受けるが、海外では3年制でも4年制でも専門学校卒業として扱われるため、4年制にするよりも学士を取得できる仕組みを整えた方が良い」との意見が多く寄せられた。こうした海外で活躍する卒業生の意見を取り入れた結果、ダブルスクール制度を導入した経緯がある。また、海外で勤務している卒業生の中には、オンライン等を活用して在校生向けの授業等に参加したいとの希望を持つ者も数多くいる。

以 上